

瓶子用法

す、酒入す、木にて作りて、箔をおして、鳳凰桐雲などを極彩色とす、口をば絹にてつゝみて、同色の平紐にても口をくゝり、又は組糸にても口をむすぶ也、高さ大かた二尺ばかりなり、禁裏御棟上の飾瓶子を見しに、籠にて作り、上を張てゑどり、高さ三尺餘り有りし、

〔三中口傳〕瓶子以紙造輪爲土居事

不知此儀、又不見之、但今案歟、不倒瓶子事尤大切也、

〔貞丈雜記酒盃〕一瓶子一對、口を蝶花形に包む時、座敷の左の方に置は男蝶、右の方に置は女蝶也、

一條々聞書に、祝言の時は瓶子の口を蝶花がたには包まず、ひしに包むと云、猶尋ぬべしとあり、是は銚子提子と瓶子一對と、蝶形につゝめば、蝶の數四ツになる也、四の字を忌む故也、

一瓶子の口外に包様も有べきに、ひし形に包むは、いかなるいはれぞといふに、菱は水草にて水底にはびこりしげり、ひしのみもかたくつよき物也、はびこりしげりかたくつよきを祝に用る也、酒も水類の物なる故、菱の花形にて口を包む也、

〔延喜式〕四十酒十釋奠料春秋 瓶子二口、平文胡瓶二口、居短榻

諸節供御酒器中宮 銀盞一合、中 金銅胡瓶一口、中

右供奉御器依前件

諸節雜給酒器 四尺臺盤三面、七月加一 白銅瓶子六合、五月減二合 平文胡瓶六合、五月減二口、並

二脚、餘節准此、○中略

右五位已上料、○中

四尺臺盤一面、○中 金銀胡瓶一口、○中

右内命婦已上料、並請内藏寮、事畢返上、

〔江家次第〕正一元日宴會